かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第２１号（令和元年７月）

上山見聞随筆

ミドリ　「今日は、図書館ね。」

あゆむ「図書館に、何か文化財があるの？」

文じい「いや、実物は別にあるが、それを印刷したものがここにあるんじゃ。」

ふみお「“上山見聞随筆”というものだよね。」

ミドリ　「“見聞”は“けんぶん”ではなく、“けんもん”と読むのね。」

ふみお「見たり聞いたりという意味だよね。」

ミドリ　「随筆と言うと、見聞きしたことや経験したこと、思ったことなどを書いたものというけど、どんなものかな？」

ふみお「とにかくさがそう。」

あゆむ「よし、一番初めに見つけるぞ！」

ミドリ　「まあまあ、そんなにあわてないの。まず、どこのコーナーにあるかを考えて。」

ふみお「ぼくは、時々来ているから見当がつく。右側の郷土資料のコーナーだよ。」

ミドリ　「あっ、あったわ！きちんと本になっているのね。」

ふみお「こっちにもあるぞ。上と下の２冊で、“上山市史編集資料”№18 と 19 だ。」

あゆむ「あれ、こんな長い本もあるぞ。上山見聞なんとか…。」

文じい「みんな、よく見つけたな。これをいったん広い机の上において見てみよう。」

ミドリ　「書いた人の名がある。すがぬま…。」

ふみお「菅沼定昭という人が書いたんだね。」

ミドリ　「全 6巻だって。」

ふみお「こっちには、文久三なんとか年、なんとか日記帳という写真がある。」

文じい「ふむ、文久三癸年、日記帳は萬と書いてあって“よろず”と読む。」

ふみお「下に、“著者が文久元年から記録した萬日記帳で、上山見聞随筆の底本となった日記帳である” とある。底本とは、もとにした本というわけだね。」

ミドリ「文久元年といっても、何年なの？　それに、いつごろこの本ができたのかしら？」

ふみお「えーとね、解説の文があって、上山見聞随筆の成立というところに、文久元年（1861）15才の時から、明治35年（1902）57才までの40年間にわたる努力を続けた記録だって。ふーん、すごいものだね！」

あゆむ「こっちは、絵がいっぱいあっておもしろいぞ！」

ふみお「この解説をみると、上山見聞随筆の編集後、直ちに“付図集”を別冊として発刊する計画を立て、明治39年（1906）に完成したとある。」

ミドリ「えーと、その時の菅沼定昭さんの年齢は61才となるわね。15才から61才までだから、もう一生をかけたということになるわね。」

ふみお「今の僕ぐらいの年から、おじいちゃんになる時まで調査記録を続けたんだね。」

文じい「ふむ。本当にすごいことだね。わしもこの記録からはたくさんのことを学ばせてもらっておる。ありがたいものじゃ。」

ミドリ「中を見てみようよ。どんなことが書いてあるの。」

ふみお「ぼくの方には、内容項目一覧というものが

ある。“上山の概要と領主”という項目から、温泉とか、寺や神社のこと、人物評、災禍、学校と役所のことなど、上山の歴史・自然・文化・人物など全部で624項目だって。」

あゆむ「そんなにあるのか。何から見たらいいのかわからないな。」

ふみお「あ、後ろの方に索引というのがある。一番から順に項目が書いてある。これからさがすといいね。」

ミドリ「あら、なるほど。でも、漢字が並んでいてちょっと大変ね。えーと、“名所・旧跡”というところに、“上山八景”というのがあって、湯の上とか、月岡城とかある。このへんを見てみない。」

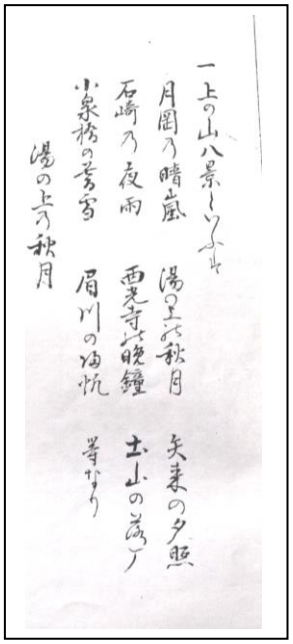
ふみお「八景というと、なんとか八景という言葉を聞いたことがある。8つのいい景色のことだったと思うが…。」

文じい「もともと中国の瀟湘八景から、日本でも近江八景など、各地で景色のいい所を8つ選んで絵などに描くようになった。」

あゆむ「それで、上山はどこなの？」

ミドリ「えーと、月岡の、はれあらし？　湯の上の、あきつき？ なんか漢字がむずかしい。」

文じい「ははは、そうじゃな、でも、もとの字はこのようになっている。」



あゆむ「うわあ、ますます読めない。」

文じい「ふむ。崩し字や変体仮名といって昔使っていた字じゃ。少し勉強しなければ読めない。でも、それを解読して、このように印刷までしていただいた。せめてこれだけでも辞書などを使って読めるようにしたいものじゃ。」

ふみお「辞書を使いながらだけど、“上の山八景というのは、月岡の晴嵐、湯の上の秋月、矢来の夕照、石崎の夜雨、西光寺の晩鐘、土山の落雁、小泉橋の暮雪、眉川の帰帆なり” でいいかな。」

ミドリ「イメージがなんとなくだけど浮かぶわね。月岡の下に、少しかすみもある晴れ渡った景色が広がっている。 湯の上観音から、秋の夜の月が見える。 いいわね！」

ふみお「あ、この後に絵がある。」

あゆむ「あれ、その絵がこっちの“付図集”というものにものっている。カラーで大きい絵だぞ。」

ミドリ「あら、こっちの本にものっている。でも、少し字のところがちがうわね。」

文じい「ふむ、おそらく、付図集にするとき菅沼定昭さんが新たに描いたのかもしれん。」

ふみお「“眉川の帰帆”につながる絵だね。」

ミドリ「それにしても菅沼定昭さんはすごい方ね。絵も上手だし。」

ふみお「こつこつと歩いて調べ、聞いて、記録をし、まとめ、絵も描いた。」

文じい「まったくじゃ。遠慮して随筆とは言っておるが、立派な歴史調査書・博物誌でもある。そして、快く実物をお貸し下さった菅沼家、それをこのような本までにして下さった方々のご苦労にも頭が下がる。大事にし、しっかり活用していかなければならんの。」

発行：　上山市教育委員会生涯学習課文化財・文化芸術係　　電話　023-672-1111（内線 314）